

# 伝え

日本口承文芸学会 会報

【伝え】第24号 1999年3月

発行 日本口承文芸学会

〒150-8440東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部 伝承文学研究室内

☎03-5466-0224

## 口承文芸資料を活用させるために

米屋 陽一

10年以上前のことだが、フィンランド・ヘルシンキ大学留学中にSKS（フィンランド文学協会）の口承文芸資料保存局に幾度となく足を運んだことがある。ここには250万件以上の資料があり、世界最大の口承文芸資料センターであるという。フィンランドでは大学図書館でも、どんなに小さな町の図書館でも、出版物、資料の公共性、公開が徹底的に貫かれている。口承文芸の資料は、個人の所有でも民族の共有財産なのであるから、いつでもどこでも公開を原則としたいものである。こんなことをずっと思い続けてきた。

これも古い話だが、京都を旅した折に新京極あたりの古書店に立ち寄ったことがある。口承文芸、民俗学関係の書籍がびっしり詰まった書棚を見つけた。店主に聞くと、この分野に関わった方がなくなったので、その家族の方が手放したのだと言う。東京神田の古書店では入手不可能な本、高価な本も混ざっていた。その中から欲しいと思っていた佐々木喜善の著作、早い時代の昔話集、民俗学関係十数冊を驚くほどの安価で購入した。自分の蔵書もいつかはこうなるのかなと思ひながら、思わぬ京都土産ににんまりしたのだった。

そんなこともあってか、口承文学資料は年々増え続けている。これらを眠らせておく手はない。作家で民話研究家の松谷みよ子さんは、東京練馬に「松谷みよ子民話研究室」を持っておられる。かなりの民話資料がそろっており、わたしどもは手元に資料がないときには利用させていただく。有料コピーも用意してあるから便利だ。岩手県遠野市立図書館は、全国の昔話伝説関係資料を積極的に収集し、『蔵書目録』も発行している個性的な公共図書館である。沖縄国際大学では情報資料の一つとして、記録されているすべての沖縄の民話を目的に応じてパソコンから引き出すことが可能になったという。口承文芸関係機関の最先端の機能といえるだろう。現在、文字による口承文芸資料から、音声・映像による口承文芸資料への移行期に入ってきた。それらの資料と同時に口承文芸に関わるマンガ本、絵本、再話（読み物）本なども広義の資料として保存が望まれる。

ところで、この間に手元に集まった口承文芸の資料をどう活用させるのか。あれこれと考えたすえ、1986年に千葉県市川市の自宅を改造し、口承文芸、民俗学関係の書物約5千冊を整理して、〈民話ライブラリー〉を開館した。大きな仕事を抱えるたびに資料は散逸して開店休業状態に入ってしまう。それでもささやかではあるが、可能な限り開館し続けたいと願っている。

白田甚五郎博士が20数年前に提唱されたことは不可能なことなのだろうか。大都会でも地方でもいい。公共でも私設でもいい。その場所に行けば全国の催し物や求めている資料が必ず入手できる。そんな日本の口承文芸資料センターの設立が望まれる。

## 自由日記の昔話集

高木史人

今回の共同討議は、斉藤純、矢野敬一両氏の発表が主であって、私は進行役に過ぎなかったのに、その打合せの途次、ひょんなことから、「自由日記の昔話集」というまとまりのない話を披露申すことになった。

岐阜県揖斐郡揖斐川町に住まいした宇佐美省吾翁(明治43年生)が、昭和46年の還暦祝に子供から贈られたのが、『山ぐにの夜ばなし』という250頁の昔話集であった。これは、宇佐美翁が昭和21年から25年にかけて、揖斐川町(当時は小島村)から名古屋港近くの東亜合成化学工業株式会社に通勤する車中で、ノートや自由日記にシャープペンシルで記した昔話や教訓譚を複写整版したものであった。挿画もすべて翁の手になるこの昔話集は、昔話の伝承者が我々と同じ時代に生きる存在だということを端的に伝えてくれる。

思えば、私がフィールドワークを始めた昭和52年からこの方、私は出会った昔話の伝承者の現代性ということについて、考えつづけてきたようである。〈口承〉という単一のメディアだけでは括れない存在として、昔話の伝承者を捉える必要があった。

しかして一方、それでは私は〈口承〉のいとなみについて、どれほどのアプローチをしてきたのであろうか。複雑に絡みあうメディアの経緯を吹き吹きほぐしながら、なおかつ〈口承〉という問いを見失なわないことが、私の希求する研究の姿勢である。今回、会場で宇佐美翁の昔話をテープレコーダーで再生しながら、〈書物〉と〈口承〉と、だが、あの時、あの場所の宇佐美翁は私と目を合わせずに、かしまって正座していたのだが、と、〈場〉と、これらの三者の差異を一身に想起しながら、私のまとまりのない話は、やや〈近代〉にまで届かぬままに、斎藤純、矢野敬一両氏の卓説に引き継がれたのであった。なお、宇佐美翁についての詳細は、平成12年春に刊行予定の『名古屋経済大学経済学部20周年記念論文集(仮称)』に掲載されるはずである。(愛知県)

## メディア・イベントと〈口承〉

矢野 敬一

〈口承〉について論じる際、しばしば前近代と近代とを対立的な図式でとらえ、前者に〈口承〉を割り振り、後者との異質性を自明視しがちである。ここではその図式を「具体」を通して検証することを目的とした。事例として取り上げたのは、新潟県岩船郡山北町府屋の桜花祭。昭和初期のマスメディアによるメディア・イベントを契機とした「名勝」の生成が、どのように伝説、うた等の〈口承〉を再編成したのか、述べた。

昭和二年、『新潟毎日新聞』が呼びかけた「第二回秋冬の遊覧地」選定のはがきによる投票コンクールによって、府屋は「紅葉の名勝」部門の第三位に入賞した。当時、レジャー活動や旅行への関心が広がり、新しい観光地開発のイベントが「日本新八景」等、多彩に行われていた。『旅と伝説』の創刊もほぼ同時期である。

投票結果の翌年、昭和三年には府屋の古館城址に桜の苗一千本が植樹され、翌四年には第一回桜花祭が実施され、続いて古館城址への道すがらに西国三十三カ所を模して、三十三体の観音菩薩石像が設置されるに至った。その過程で府屋にかつて在住していた大川三郎二郎の伝説の曖昧な部分が排除され、伝説が固定化してゆく。桜花祭はその維持、存続の機会としての意味をも担うことになる。また祭のうたは、社会教育団体修養団の団歌をもとにして歌詞を変えて作られたとされ、受け手側が独自の改編をして今に伝えるものだ。

以上のように、〈口承〉とマスメディアとの関係は一枚岩ではなく、両者の関係を微視的に検証する必要がある。またマスメディアによって「伝承」が見いだされる過程と、研究者が「伝承」を見いだす過程とは、時としてパラレルな関係にあり、多様なメディアとの関係性を視野に入れた、学史の新たな構築作業が求められる。

(静岡県)

## 名所の成立と桃太郎神社

### —観光地の伝説を読む—

斎藤 純

木曾川中流の観光地日本ラインに鎮座する犬山市栗栖の桃太郎神社は、桃太郎の誕生地という「伝説」の考証にもとづき、子供神・子守社と呼ばれていた桃山麓の山の神を改称・遷座し、昭和5年に新しく創られた神社だが、この神社が発想された背景には、見立てによる観光名所の成立が盛行していたことを論じた。

時代背景としては、大正～昭和初期は児童が注目された童話の時代であり、桃太郎論も盛んになり、伝統文化の自覚から郷土研究が興隆した時代である。犬山では、名鉄線が延びて観光開発が本格化し、昭和2年には鉄道省後援の日本八景に選ばれて全国的に脚光を浴びる。

この犬山周辺の名所の成立を検討すると、近世に木曾川下りが、李白の詩「千里江陵一日還」に重ね合わされる。犬山城は「白帝城」と呼ばれ、昭和になると、この別称は奇勝「菟花溪」とともに荻生徂徠の命名だとされるようになる。付近には「新赤壁」なる絶勝もでき、近世以来の中国趣味が新たな名所を生んでいる。

一方、大正2年、志賀重昂は、付近の景色がドイツのライン川に似ていることから日本ラインと名づける。やがて、水中から機織歌が響くという岩がローラレイと呼ばれ、昭和になると、竜がいたという池がジグフリードの竜退治の池に比べられる。川岸の果樹園はフランスの葡萄畑、犬山名物の薬用酒はワインに見立てられ、西歐への思慕がやはり新たな名所を生むことが確認できる。

このように、犬山付近は時々の嗜好に応じ、憧憬の地の見立てによって名所を生んできた。童話と郷土と観光の時代、土地と桃太郎を重ね合わせ、その見立てを「伝説の発見」として打ち出し、参拝客の集まる神社を作ろうとした背景には、こうした水脈があったのではないか。(兵庫県)

## <報告> 語りの周辺

1998年九州・沖縄

伊 藝 弘 子

九州・沖縄における「語り」とその周辺状況について報告する。九州では沖縄を含めて毎年開かれている「昔話を楽しむ九州交流会」の第12回が大分県別府市を主会場に8月22・23日に開催された。

沖縄県では地域の活動をしている沖縄地域児童文庫連絡協議会が「語りのリーダー育成講座」を開き、新劇俳優の前原弘道氏・沖縄国際大学教授遠藤庄治氏により講義と多くの沖縄の昔ばなしが紹介された。

3月28・29日には、沖縄国際大学で小澤俊夫教授による昔ばなし研究交流会が行われ、社会人参加者に大きな刺激を与えた。8月8・9日には奄美沖縄民間文芸研究会研究大会が沖縄県立芸術大学で国内外の研究者の出席のもと開催された。10月から12月にかけて、沖縄県広域サービス事業の「沖縄の民話」が遠藤庄治氏を講師に沖縄国際大学を会場として社会人対象に開催された。10月3～5日は、隔年開催されている「全日本・語りの祭」が宜野湾市で同実行委員会と44の後援団体により500人近くの参加者を迎え開催された。3日の前夜祭では、浦添市の伝承者平良俊太郎翁の「チブル蜂の由来」の方言語り、4・5日は、記念講演を翻訳家で児童文学者の大月ルリ子氏が「今、語ることの意義」小河内芳子氏外2人の語り、名護市の山本川恒翁の方言語りに続き粟国島の民俗芸能「大晦日の塩売り」が演じられた後「伝承民話の語り」「世界のおはなし」「見せて語るおはなし」「語りを生かした紙芝居」「自分史を語る」「語りの入門講座」「乳幼児への語り」の7つの分科会に分かれて、各分科会とも参加者が主役となって賑わった。「自分史を語る」分科会では、満州で終戦をむかえ帰国までの厳しかった生活や凍った両足切断を決意させた友だちのこと、19歳で入隊し浦添→首里→島尻へと火炎放射器に追われ両手両足を切断した人の証言、マラリアの有病地帯へ強制疎開しそこでの地獄絵、悪石島沖でたった11分で沈没した対馬丸から夜の海に放り出された数少ない生存者の証言等があった。夜は各部屋に分かれて「夜語り」がもたれた。(沖縄県)

## 新刊紹介

(書名/編著者/発行所/発行年)

- ・「語りを現代に-ことばではぐくむ子どもの世界」矢口裕康 エイデル研究所 1998. 4
- ・「昔話の森-桃太郎から百物語まで」野村純一 大修館書店 1998. 4
- ・「呪歌と説話」花部英雄 三弥井書店 1998. 4
- ・「神話と歴史叙述」三浦佑之 若草書房 1998. 6
- ・「世界の龍の話」竹原威滋・丸山顯徳 三弥井書店 1998. 7
- ・「われべうた」武田正 置賜民俗学会 1998. 7
- ・「菅江真澄研究の軌跡」磯沼重治 岩田書院 1998. 9
- ・「山陰の口承文芸論」酒井董美 三弥井書店 1998. 11
- ・「現代民話の諸問題」日本民話の会 1998. 11
- ・「近世説話と禅僧」堤邦彦 和泉書院 1999. 2
- ・「ミナエ婆の村むがす」鈴木久子・野村敬子 岩田書院 1999. 2

## 受贈書リスト

- ・「白い国の詩」1998年7～12月号 1999. 1・2月号 東北電力株式会社地域交流部 創童舎 1998. 7～1999. 2
- ・「国際日本文学研究集会会議録」(第21回) 国文学研究資料館 1998. 10
- ・「日本民話の会通信」 No141 日本民話の会 1999. 1

## 事務局報告

### 第23回 日本口承文芸学会 大会のお知らせ

月日 平成11年6月5日(土)～6日(日)

場所 沖縄国際大学(沖縄)

公開講演・シンポジウム・研究発表・  
会員総会・懇親会などを予定してい  
ます。  
詳細は後日お知らせします。

日本口承文芸学会への入会希望者は入会申込書をご請求下さい。

入会金1000円 年会費4000円

入会申込書請求先：〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

國學院大学文学部伝承文学研究室(野村教授)内

日本口承文芸学会事務局 TEL.03-5466-0224

送金先：[郵便振替] 00180-4-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan

c/o Prof. J. Nomura, Kokugakuin University,

4-10-28, Higashi Shibuya-ku, Tokyo, 〒150, Japan